義太夫

義太夫協会々報
第３号
昭和４９年１月２８日
社団法人　義太夫協会発行
〒104　東京都中央区銀座
６－１８－２
新橋演舞場別館 TEL(541)5471

芸名の表札を

会長　吉川英史

わたくしはこの二月十三日で満六十五才になります。武蔵野音楽大学の停年制によって武蔵野音大を退職するのを機会に、東京芸術大学の方もこの三月きりで、やめさせて貰うことにしました。

その武蔵野音大の試験の大きい問題として長唄の江戸時代の終りまでの歴史と、義太夫節についての問題を出して、どちらかを選んで答えさせましたが、大部分の学生は義太夫節について答えました。比較的良く理解しているのに安心しましたが、ほとんど全部の学生がピアノやバイオリンなどの洋楽を学んでいる学生なので、必須科目でなく選択科目なのに、日本音楽を学習してみようという気持になっているわけで、当然といえば当然ですが、十年前の日本の音楽大学を考えますと、正に隔世の感があります。しかも、日本音楽の中でも、非常に特殊なものと考えられていた義太夫節についても興味を持ち、理解を示していることを、わたくしは嬉しく思います。

嬉しいと言えば、国立劇場の文楽がいつも満員になりだしたことも、同慶の至りです（ただ、そのためか、招待券がこなくなったのは、ちょっぴり残念ですが……）。さらにわが義太夫教室がいつも予期以上の志願者と敬服すべき熱心さと、かなりの成果をあげていることも、嬉しいことです。

かてて加えて、このたび文部省から助成金が貰えるようになったことは、ご同慶にたえません。それは単なるお金の問題ではなく、義太夫協会の事業が、国家的に認められたという点が一層意義があるからです。

しかも誠にタイミング良く新しい事務所が新橋演舞場のご好意により使用できることは、協会の飛躍的な発展を象徴するかのような快事で、喜びにたえません。今年度の協会の飛躍的な発展を期待するものであります。

ところで、このような状況において、わたしから協会の皆さんに提案があります。実は先般協会のある有力な方にハガキを出したのですが、二度も「尋ねあたりません」ということで、返送されて来ました。その原因は、わたくしが芸名で差出したのに、先方の家には芸名の表札が出ていないで、本名の表札だけしかないために、配達できずに返送されたものと想像されます。

わたくしにしてみれば、有力な方なので、本名よりも芸名の方をよく知っているものですから、何の躊躇もなく、芸名で出したわけです。それですから、返送された時には意外でした。わたくしは、長唄の人や、箏曲の人にはほとんど芸名で通信しています。義太夫の人が芸名では通用しないということでは、どうもうなずけません。

日本人は少し遠慮勝ちな所がありますが、芸名の表札を出さない原因に、この遠慮ということがあるかも知れません。しかし、今は宣伝の時代です。良い意味の宣伝は必要であります。協会の芸名をお持ちの方は、本名の表札に並べて芸名の表札を出して下さると、義太夫全体の宣伝にもなるのではないでしょうか。その表札を見る郵便屋さんばかりではありません。表札を見る通行人が義太夫というものの存在を知らされることになるわけです。

それに、芸名を本名以上に大切にする人こそ、世間はその人を専門家と見なすのではないでしょうか。芸名を持っていても、それよりも本名の方を多く使う人は、素人か、半玄人くらいにしか思われないかも知れません。芸名をお持ちの協会の皆さま、芸名の表札をどうぞ!!

新年の御挨拶

副会長　豊沢仙広

石油問題で何かと慌ただしい世相をよそに東京は義太夫ブームで、私どもは嬉しい四十九年を迎えました。

おめでとうございます。

石の上にも三年と、「夢が浮世か浮世が夢か」、老いる我が身を忘れて一生懸命に元気よく浄瑠璃を勉強し、義太夫節の発展に努力したかいあり、国に認められて助成金も決まり、青年の若さをもつ東京の義太夫協会の、四十五年夏の社団法人発足から、旧臘廿二日に新事務所に移転し成人の日に事務所開きを行なうことができるに至った今日まで、すべて会員皆々様の御支援の賜と、厚く厚く御礼申上げる次第でございます。

こんな良い場所にりっぱな事務所が出来ましたのは、新橋演舞場株式会社の専務、義太夫のお好きな岡副様の、並並ならぬお力添えのお蔭でございます。会員の皆様は、岡副様にお会いの節は宜しく御礼申上げてくださいませ。

会員皆様の事務所でございます。専任の事務員橋本さんは、古典芸術の大好きな若き美女で、十一時から五時まで、お茶のサービスで皆様をお待ちしておりますゆえ、演舞場御見物のゆきかえりには是非お立寄りをお願い致します。

私は正月の五日間、外出もせず買溜めもせず、腕が痛くなるまで、ひとりで心豊かに三味線を弾き日本一の幸福感を味わいました。

人間性豊かに謳い上げる義太夫節に心をゆだねれば、どんな世の中になりましても恐れることも無く、心配のあるときに読めば、心が広くなる力をもっている浄瑠璃文学でございます。皆様も試してごらんなさいませ。

吉川会長の御指導のもとに、正会員一同、今後ますます義太夫節発展のために努力する所存でございます。

会員の皆様に四十九年の幸多かれとお祈り申上げて、新年の御挨拶と致します。

斯の道六十四年を顧みて

相談役　豊沢猿三郎

門松は冥途の旅の一里塚、と一休禅師がお詠みになったとおり、人の一生はまことに速いものでございます。父初代才造の手ほどきを受け、父の歿後、明治四十四年に赤坂の師匠の内弟子になり、大正八年には徴兵で軍務に就きました。その当時の東京駅は極くひっそりとしておりましたが、入隊当日、因会の先輩二百人が日の丸の旗でお送りくださったのには驚いたものでありました。これもみな師匠のお蔭でございました。

除隊後再び内弟子になりましたが関東大震災に遭い、それを機に新宿に稽古場を開きました。その頃の御連中で今日生存しておられるのは小柳団鳳・河野国声の両氏だけとなりました。昨年は、大正十二年に稽古場を開いてから満五十年になりましたので、これを機に稽古場を閉じました。そのため、長年おなじみであった聴き手のお爺さんお婆さん達とも逢えなくなり、いささか淋しい気がしております。

今日では、余生を主に舞踊の伴奏に注ぎ、義太夫道のため、一所懸命勤めております。

顧みますれば、少年期青年期に、大勢の前で師匠にどなられ、ぶたれた苦しみもありましたが、六十四年の永い間、好きな芸の道で大過無く勤めさせて戴きましたことは、ほんとうに嬉しいことでございます。

今後も命ある限り、及ばぬ力ながら斯道のために尽したいと存じます。ところてんではありませんが、押出され突出され、遂に東京の現役の最古参に押出されてしまいました。なお一層一所懸命尽したいと存じます。何卒お引立てのほどをお願い申上げ、新年の御挨拶と致します。

新事務所開設

祝辞

社団法人義太夫協会新事務所開きの御招待を受けまことに嬉しく、一言祝辞を申述べます。

協会は現体制発足以来僅か三ケ年半の間に、当初計画された諸事業を着々と実行せられ、東京に於ける義太夫節保存復興に顕著な功積ありと認められ、文部省から助成金の交付を受けられるまでの実力を確保されましたことは、会長初め会員諸氏の協会運営に対する御努力と、発表された芸力の真価とが社会に認められたものと、深大な敬意を表する次第であります。

このたび、協会の活動上、まことに申し分のない地の利を有し、しかもかくも立派な事務所を得られましたことは、今後の輝かしい発展の何よりの基礎と、まことに慶賀に堪えません。

会員各位に於かれましては、いつまでもお元気で、各々修得せられました至芸を後進に伝授され、東京に於ける正しい義太夫節を、永久に伝承されんことを希望して止みません。

昭和四十九年一月十五日

大日本素義会会長　加藤聚楽

―事務所開き―

昭和四十九年一月十五日成人の日を期して社団法人義太夫協会の新事務所が誕生し、その事務所開きを、多数の来賓諸先生方の御列席を頂いて華々しく催されました。当日は晴天に加えて、小春日和の暖かさ、折から成人の日を寿ぐ若い晴着姿のお嬢さん方が、芝居見物や街にあふれていました。新事務所は地のりのよい新橋演舞場の別館で、同棟の高速道路側にあり、玄関入って左側、陽のよく当る、まことに小じんまりとした我が義太夫協会事務所には、まさに恰好のほどよい広さであります。会員多数の御寄付のお蔭で、事務所内は冷暖房も設置し、電話機も、デュプロ印刷機も、その他事務に必要な諸備品をも完備することが出来、更に新しく女事務員の入社と相俟って、今後の協会の運営及び事務の遂行に万全を期することに致しました。

事務所開きに備えて、午前中には準備万端整い、予定時刻の正午より三時まで、御祝にかけつけた来賓でひきもきらず、事務所前のロビーにしつらえた立食パーティーでは、会員相互の和気あいあいたる談笑の中に、先づ乾杯から始まり、会長吉川英史先生及び副会長豊沢仙広氏の挨拶、次いで来賓内野正幸氏寺中作雄氏他各先生方の御祝辞を頂戴し、などやかな中に事務所開きを催しました。猶、文楽協会からは花輪、NHKよりは祝電も届き、今後の協会の前途に大きな期待が寄せられています。

今までは、他社との共同事務所でしたが、今度は晴れて協会も成人となり、一本立ちをした立派な事務所を構えられたことも、偏に会員各位の御協力の賜物と、役員一同感謝致しております。どうぞ皆様の事務所として、末永く可愛がって頂きたく存じます。猶又、お近くへお越しの折は是非お立寄り下さい。

新事務所開設に伴い、諸経費の予算と御寄付頂きました方々を御報告させて頂きます。

寄付者御芳名（順不同）

（四十九年一月十五日現在）

加藤聚楽様	一〇〇、〇〇〇円
松岡語松様	一〇〇、〇〇〇円
河野国声様	一〇〇、〇〇〇円
内野正幸様	一二〇、〇〇〇円
土佐会様	一〇〇、〇〇〇円
菊地秋月様	六〇、〇〇〇円
松尾武市様	六〇、〇〇〇円
鈴木一光様	五〇、〇〇〇円
増田伊年子様	五〇、〇〇〇円
小田切一鳳様	五〇、〇〇〇円
斉藤義勝様	三〇、〇〇〇円
藤田昌子様	一〇、〇〇〇円
平井ヒロ様	一〇、〇〇〇円
島春栄様	一〇、〇〇〇円
渡辺兼造様	一〇、〇〇〇円
竹本駒若様	一〇、〇〇〇円
集団の音様	五、〇〇〇円
高野俊雄様	五、〇〇〇円
寺中作雄様	三、〇〇〇円
合計	八八三、〇〇〇円

事務所設備諸経費

契約敷金＝二〇〇〇〇〇円、ルームエアコン＝二三六〇〇〇円、同工事費＝四五〇〇〇円、電話加入権＝七三四三八円、同工事費＝一九五〇〇円、配線工事＝五〇〇〇〇円、電気メーター＝五〇〇〇円、デュプロ印刷機＝一一〇〇〇〇円、机＝三九九〇〇円、椅子、ボックス＝二九六〇円、カーテン＝八〇〇〇円、事務用品＝二五〇〇〇円、消耗品＝四〇〇〇〇円、諸雑費＝二〇〇〇〇円

合計　八九三、七九八円

三越劇場義太夫演奏会の印象

内野三憙

近頃義太夫ブームという声を聞く。私は少年のころ義太夫を習ったので、義太夫は以来ずっと好きである。

話題は、旧臘十六日の心身障害児のための慈善公演である。この会の主催は、社団法人義太夫協会とNHK厚生文化事業団であった。招待の文に「寄金は特に〝語りもの〟〝ことば〟の芸能である義太夫節と関係のある言語障害児のために役立てていただくことになっております。」とあった。出し物と出演者を略記する。

冥途の飛脚　孫右衛門　竹本重之助
　　忠兵衛　竹本綾華
新口村　梅川　竹本駒龍
　　捕手　竹本歳栄
三味線　鶴沢三生
心中天網島　孫右衛門　竹本土佐広
河庄　治兵衛　竹本光末
　　小春　竹本綾之助
三味線　豊沢猿公
心中天網島　治兵衛　竹本越道
紙屋　おさん　竹本春華
　　五左衛門　竹本素八
　　小春　竹本糸三
三五郎　竹本朝重
おすゑ　竹本綾一
三味線　豊沢仙広

年来私は、暇をみて三越劇場・国立劇場などの文楽はよく見たし、明治の名女義竹本小土佐の晩年、戸越倶楽部の常連であった。小土佐は今年百三歳、大宮市に隠栖し極めて元気である。

素語りと人形浄瑠璃とどちらがよいかと問われたら、上手でさえあれば素語りの方がよいと応える。上手な語りは、義太夫と三味だけで、登場人物を幻想のうちに眼前にしてくれる。素より義太夫は素語りが本筋であるが、文楽も嘗ての吉田文五郎のように、人と人形が一体化すると文楽もよい。但、この場合太夫と人形は、地位転倒して、太夫は歌舞伎のちょぼに落ちかねない。少くとも文楽鑑賞には視聴覚同時作業なので、鑑賞が散漫になる。浄瑠璃のストーリーをしんみり聴きそこねる。且、私の人形への不満は、女人形の据さばき、男人形の足運びであり、未だに改良されない。端役人形を宙吊りにして一人使いで振回すのは、コミカルで脳が休まる。

この夜、五時から凡て出し物は掛合にして、前の通り高座に数名ならんで、一応高座は絢爛たるものだった。肩衣袴は総じて地味。口上を省いて、寄席のように芸題を高座右端にめくり紙にしたのは、へたな伝統破棄であった。拍子木と上手な口上につれて緞帳をまき、演技者が面をあげ、揃って正面をきって構え、間よろしく絃の一音を響かせる伝統の演出は、絶対の魅力である。相撲であれば、呼出しから仕切りである。

掛合は一太夫が一段を語るよりむづかしい。二人の太夫が隣合って語を交すのなら、気合も入り間も、切迫感も旨くわく。中を二人も隔てると、意気投合が困難で、ひどい時には間がぬける。語りのない時の静座の時間、一人で三味を聴いている時も同じで、竹本小土佐は「語らない時がむづかしい」と言った。この事は又三味線も同じで、左手を袴においての静止の姿勢、左肘の張具合、表情のむづかしさである。撥と左手、指を使う動作時は腕次第、静止時には自ら力量と人間性までが露呈される感がある。

概して言えば、寄席の伝統、身についた芸を劇場・ホールで公演する際の演出については、技芸家も高座の舞台装置的配慮も、場所柄と聴衆層、従って時代感覚に即応する工夫が必要である。寄席が椅子席になっても、寄席特有の親近感は保てよう。劇場やホールでは、それが失われる。場の雰囲気が全く異るからである。切実な問題は、声が散逸して、前から三列目の椅子にいても、大所の義太夫すら遠くかすんで、義太夫がしょんぼり小さくなる恨みがある。流行歌手は手持マイクをアクセサリー然と使って、よい気でいるが、莫迦な話だ。といってもマンモス・ホールでは止むをえまい。然し、あれでは本格的な声楽でもないし、第一声帯が発達しない。従って疾くステージから姿を消す。義太夫では手持ちマイクは持てない。更に義太夫は低音の部分が多い。声が通らなければ語りにならない。肉声には個人差はあるが、幾ら練えても限界はある。精巧な隠しマイクを利用することを考えてもよいと思う。但、楽をすることを覚えて、発声の鍛錬を怠っては致命傷である。この点生来の美声の天分が、義太夫の大

成に危険である。美声と声量の天与を終生生かして巨匠になったのは、明治・大正の女義の女王のごとく評された呂昇一人といえる。今日、女流義太夫の老大家が、しわがれ声とはなっても、猶いざという時、かなり豊かな声量を発揮し、低声は低声なりに努力して通る声を出し得るのは、永年の修業の為である。

人体の老化に、臓器によって遅速があり、一般に声帯の老化が最も遅いという研究結果が出ている。若いうちに鍛錬した声帯は一層長持ちがする。義太夫や謡曲・常磐津・新内など老大家が、その齢だけの深味のある美声を長く保持する事実は、少青年時の練えに依るものだ。水谷八重子の「芸・ゆめ・いのち」という随筆集の中に、ある師匠が「何でもいいから舞台で大きな声を出せ、俺の教えることは、それしかない。」と教えられたと書いている。女流義太夫人は、子役から男の老人まで一人で語らねばならぬ、声に巾を持たねばならぬ。一度や二度声をつぶす程の猛練習をせねば物にならぬ。

現に義太夫は劇場に、ホールにと進出している。大劇場に登場して、歌舞伎・舞踊・歌劇と美を競うのだ。何れも肉声が大きな比重をもつ。就中義太夫は、美声と声量とその使い方が体動を伴う芸術より、一層声帯に比重がかかる。若い時の声帯鍛錬が、芸生涯を決定する。

もう一つ三越劇場での実感は、現行の床着の統一であった。冬の黒はよいが、夏の白衣はまずい。日本婦人を最も美しく見せるのは黒の喪服である。黒の洋装もデザイン次第ではよい。喪服は白も用いるが、今は少い。私は故実にうといが、白衣は武士階級の死装束が本来の色であったようだ。それは別として、神主や巫女も常用する。強いて美しいと思うのに出会うのは結婚式の花嫁の白のドレスだけだ。過日、上野の本牧亭で白の床着に緋の袴をつけ肩衣を着た若手の義太夫語りをみたが、巫女が肩衣をつけたようで、それが気になって折角の義太夫をふいにした。芸を聴かせるのだ、服飾など何でもよい、と言うのならなぜ肩衣袴をつけ、蒔絵房付きの見台を使うのか。初代義太夫の見台は、多分語り本何冊かを中に容れていた単なる箱であった。

特別な義太夫の愛好家、御常連も聴衆として大事であるが、義太夫協会も義太夫も時代を超越でき得ない。時代嗜好は大衆が握っている。大衆の審美欲は、概ね総合的な美意識であり、現代俗にカラフルという明朗好みである。私はこの傾向を決して絶讃はしない。但、興業となるとあくまで大衆に抵抗すれば孤立化す。ホール、雰囲気、照明、音、色彩、施設、清潔感、そうしたものが意外に大きな比重をもつ。

明治全盛期の女義界の一部の批判に、現今の女流義太夫が右顧左眄する必要は、さらさらない。むしろ齢相応の身のよそおい、色彩・模様であるのが自然である。語りや、節、さわりのゼスチュアも適切なればこそ義太夫に、より実感が沸く。表情の場合、男の太夫より女性が遙かにまさる。義太夫は一人素語りの場合、男女技芸家相互に発声上の生理的無理がある。掛合の場合、女流義太夫の名手と文楽義太夫の大物の合同を実現するなどは、最も手近かな有意義なことだと思う。

三越劇場義太夫公演の芸能女史各位についての印象は略記に止どめる。一言にいえば、この夜の大所、土佐広、重之助、越道諸女史は、ピーク乃至すでに老化であるが、さすがに貴重な手本であった。後続に疑念をもったり、悲観した客は少なかったろうが、中堅層の薄いことは否めない。中堅に上手もいたが迫力が乏しい。私の最も注目するのは中堅上位の春華と新進上位の二代目朝重であり期待をかけている。初代朝重は竹本小土佐の姪で、小土佐が朝重（本名きん）八歳の時から幼育と仕込をした。従って二代朝重は小土佐から三代目に当る。

何にしても協会が、会長に吉川英史先生を、副会長に豊沢仙広女史を得、その他多士済々の人材をもって、義太夫興隆の実をあげ、現に協会事業の一である義太夫教室の実績が著しく挙っている。昨四十八年から協会も助成金を受ける。独立の協会事務所が近々新築落成する。所謂ブームの高波を起すのは今年である。

手取り早い全国的義太夫普及には、この古典文学の語りと、太棹の音楽が古くからNHKと繋りをもつのが強味である。協会は難解と言われる浄瑠璃を、現代人に理解し易く修正したり、新作浄瑠璃を創作したり、地方出張の道を開いたり、凡ゆる努力を払うべきであろう。きわめて手近な仕事は、現に実績をあげている教室の充実、優秀な新進を送りだすこと、即ち女流義太夫人の層を重くするのが急務である。

（次頁へつづく）

協会の動き

昭和48年1月より
昭和49年1月まで

〔昭和48年〕

1月20・21日　女流義太夫公演、於本牧亭。
22日　新年懇親会、6時より於本牧亭。会長以下70名参加、余興などあって賑やかに行われた。
2月4日　東京都主催「都民の為の邦楽大会」昼の部に土佐広・猿公他の「壺坂」夜の部に喜久太夫・吉平他の「八段目」が参加。於第一生命ホール。
20・21日　女流義太夫公演、於本牧亭。
28日　学校巡演。都立向ケ丘高校生徒に「新口村」「義太夫の曲節」を聴いてもらう、於上野文化会館。
3月20・21日　女流義太夫公演、於本牧亭。
30日　東横ホール名韻会に義太夫教室生徒出演。五挺五枚十名にて「野崎村」演奏。補導越道・彌乃太夫。
4月20・21日　女流義太夫公演、於本牧亭。
4月23日　定例理事会　総会の件、第26期義太夫教室の件他。於文明堂別室。
5月20・21日　女流義太夫公演、於本牧亭。
6月4日　第26期義太夫教室開講式　吉川会長・副会長他出席して行われる。講習生約70名参加、式後直ちに授業が行われた。於俳優協会稽古場。
6月8日　昭和48年度「総会」　会長・副会長挨拶、昭和47年度事業報告、昭和48年度事業計画等行われる。会長以下40名出席。於文明堂別室。
20日　定例理事会　賛助会員演奏会の件事務所の件他。於新小松。
20・21日　女流義太夫公演、於本牧亭。
7月20・21日　女流義太夫公演、於本牧亭。
27日　納涼賛助会員演奏会　義太夫の他長唄・清元・常磐津・小唄・民謡等賑やに催された。於三越劇場。
30日　義太夫教室閉講式　二ケ月間行われた第26期教室が盛況裡に終了。
8月20・21日　女流義太夫公演、於本牧亭。
25日　役員会（常任理事）　事務所移転の件、専任事務職員の件、文化庁助成金の件他。於新小松。
9月20・21日　女流義太夫公演、於本牧亭。
10月20・21日　女流義太夫公演、於本牧亭。
11月5日　役員会（公演企画部）　正会員慈善演奏会の件、12月本牧亭女流師走公演の件他。於新小松。
20・21日　女流義太夫公演、於本牧亭。
12月8日　役員会（公演企画部）　女流師走公演の件他。於新小松。
8日　相談役を囲んでの忘年会　菊地秋月氏を始め相談役の方々をお招きして報告やら今後の協会の在り方について御意見を伺う。於新小松。
16日　第三回心身障害児の為の「慈善演奏会」　大近松二百五十年忌を記念して「新口村」「河庄」「紙屋内」を女流総掛合にて演奏。多額の寄金をNHK厚生文化事業団に託す。5時～8時。於三越劇場。
20・21日　女流義太夫師走合同公演吉例の「忠臣蔵」を多数出演にて賑やかに行なう。於本牧亭。
22日　事務所移転
24日　昭和48年度「祖先祭」　11時半本堂にて読経、12時墓参、12時10分より会長・副会長挨拶、新会員披露、その他あって会食の後解散。於回向院。

〔昭和49年〕

1月7日　仕事始め
15日　新事務所披露。正午～三時。

（前頁より）

いま、人心の荒廃は何人も肯定している。子の親は、子の入学と思想の二重苦に喘いでいる。このとき義太夫の興隆は、一見迂遠の道のようで、決してそうでない。ここに芸の根本精神を据えて義太夫を語らないと、芸能で紫綬褒章、勲五等をもらっても虚しい。勲の字は、国家に功のあった場合のみに使われるのである。

（一九七四・一・六）

（２ケ年対比）

貸借対照表（46年度 47年度）

（借方）勘定科目	（47. 3. 31）金額	（48. 3. 31）金額	（貸方）勘定科目	（47. 3. 31）金額	（48. 3. 31）金額
現金在高	3,080	1,160	基本財産	3,000,000	3,000,000
小口現金	16,180	2,239	運用財産	1,100,000	1,100,000
当座預金	247,006	35,106	前受金	44,000	26,000
定期預金	3,500,000	3,500,000	借入金	13,427	194,427
郵便貯金	150,030	7,935	預り金	962,000	991,000
未収金	230,000	608,000	未払金	163,610	187,000
仮払金	45,000	3,000	繰越金	△427,056	△865,636
前払金	25,000	16,500	（小計）	(4,855,981)	(4,632,791)
備品	201,105	211,605	差引当期損金	△438,580	202,246
敷金		45,000			
（合計）	4,417,401	4,430,545	（合計）	4,417,401	4,430,545

損益計算書（46. 4. 1～47. 3. 31 47. 4. 1～48. 3. 31）

（借方）勘定科目	46. 4. 1～47. 3. 31 金額	47. 4. 1～48. 3. 31 金額	（貸方）勘定科目	46. 4. 1～47. 3. 31 金額	47. 4. 1～48. 3. 31 金額
公演車代	446,700	301,600	会費収入	575,500	949,000
会場費	513,300	607,440	補助金収入	200,000	200,000
印刷費	156,091	84,170	銀行利息	285,885	227,787
通信費	106,943	109,008	寄付金収入	286,000	211,500
消耗費	184,055	85,285	女流公演収入	780,500	442,800
交通費	61,930	37,750	賛助会員会収入	190,000	204,000
床世話荷上料	221,500	170,100	義太夫教室収入	111,600	608,500
交際費	123,010	53,735	慈善公演収入	166,673	381,050
会議費	58,430	66,230	雑収入	34,706	81,433
家賃（事務所）	231,517	221,658			
事務費	45,930	9,000			
給料手当	375,130	480,000			
権利金	15,000				
倉敷料	8,000	60,000			
慶弔費	39,000	62,850			
義太夫教室	256,260	583,925			
慈善公演（寄付）	166,673	381,050			
邦楽祭他		129,650			
資料		10,000			
雑費	7,975	54,865			
雑損失	52,000				
当期損金	△438,580	△202,246			
（合計）	2,630,864	3,306,070	（合計）	2,630,864	3,306,070

（会費内訳）	（46年度）	（47年度）
正会員 80名）	158,500	87名）297,000
賛助会員 123名）	247,000	138名）451,000
特別会員 34名）	170,000	41名）201,000
小計	575,500	949,000

〝義太夫登竜門〟

竹本　彌乃太夫

長いこと沈滞していた邦楽界が、此処数年前からやや活気を呈して来た。特に若い人の間で邦楽に関心があつまって来たことは大変喜ばしい限りである。その機を逃さずと言うわけでもないが、タイミングよく義太夫教室の再興を企って募集したら、五六十人の応募者があり、以来毎年引きつづいて教室を開講し、三年間に約二百五十人程の生徒が、吉川先生の講義を受けたり、短期間ではあるが、実技の勉強もした。今までは年寄りの為のものような錯覚を与えていた義太夫も、若い人に大いにファンになって貰うことは、これからの斯界発展につながる大事なことで、その意味でも義太夫教室の存在価値がある。現代の風潮として、生徒の中には熱病的に太棹の音に魅了されて入って来たり、ダイナミックな語りのとりこになったり、教室生徒になる動機は様々であるが、例え一時的にせよ、義太夫の外観を知って貰うだけでも結構なことである。それこそ生徒の中からプロが誕生すれば、わが意足れりとするところである。

どんな芸術でも後継者の養成ということが叫ばれて久しいが、特に我々伝統芸術を誇る義太夫界に後継者の少ないことは、日本文化の損失で、その点協会でもそれらに本腰を入れてその育成方法を考慮すべきである。例えば義太夫教室生徒や、プロになった若い人達の扱い方である。旧態に捉われていないが、義太夫教室はアマの集団である。その点プロは基本的にアマと相違がある。最近教室から転向したり、個人師匠の門を叩いてなった若い女子のプロが数人いる。その人達の間で、芸術を通してお互いに話合いが出来、研究が出来、それこそ切磋琢磨し合って勉強が出来るような場がないことは残念である。例えば師匠は、自分の弟子が他の師匠の教えを受けることを拒む、もっと開放的に、多くの若い世代が研究の場で、他の先生の教えも受けたり、講義も聞いたり、話合いが出来るようにさせる。研究の場というのは、いわば義太夫教室専科のようなもので、協会も、各先生方を委嘱して多角的に若い人に芸の勉強をさせる。

内弟子のような状態で、弟子が師匠の顔色を窺ったり、特殊な勉強をしたくとも、よそへ行くことをためらうような事をさせず、幅広く若い人達の交流の場、研究の場を与えて、最終的には、若い人達で単独公演が出来るような方法をとりたい。アマプロを問わず、芸術を通して現在の義太夫教室も何んらかの形で、若い人達の交流の場となり得るかも知れない。文楽に研修生制度があるように、我々東京の義太夫協会にも、義太夫教室の存在あり、その教室をもっと拡大して、更に内容を充実し、それこそ義太夫のこれからの勉強は、義太夫教室に入ること、というキャッチフレーズで、義太夫教室は義太夫登竜の門でなければならない。

御遠慮無用（投稿）

義太夫協会の発足から二十六年目、法人化実現から四年目。役員各位が斯道振興のために尽力し、着々その実を挙げていることは、直接間接に見聞し、十分に承知している。

協会に対し、国やＮＨＫから助成金が出ることになった由。御同慶ではあるが文楽に対する補助金に比べると雀の涙に過ぎない。ズブの素人の間には、操り各座の生残りの「文楽」という名称を、固有名詞ではなくて人形浄瑠璃という意味の普通名詞であるとする誤解があるほどだが、東京の協会にも文楽にヒケをとらぬ独自の存在意義と功績とがある。

国民や都民の税金を、えたいの知れぬ数多くの団体に流用するよりは、この協会のような意義ある団体にもっと多く交付されることを希望するが、それはそれとして、年額三千円という廉過ぎる会費と多大の金額に相当する招待とは、いかにも心苦しい。斯道および各師の努力・識見を尊重したい我々としては会費の値上げと招待廃止（せいぜい割引き程度）とを提案する。

（一賛助会員）

〜〜〜〜☆〜〜〜〜☆〜〜〜〜☆〜〜〜〜

編集後記

慈善公演・師走公演・祖先祭・事務所開きそして会報作成・正月公演・新年会と続くにあたって感じられるのは、会員相互の連絡が不十分な点である。投書にもあったように、遠慮無く、積極的・虚心坦懐・卒直・迅速に連絡し合いたい。その意味に於ても、本誌の原稿を、一年中、どしどし寄せて欲しい。